凡　例

一、『兵庫県百五十周年記念　兵庫県史〜この五十年の歩み』は、兵庫県百年史以降の昭和四十二年から平成三十年までを対象とし、「序」「第一編」「第二編」「第三編」「第四編」「結」からなるが、この巻は第一巻として「序」「第一編」を収める。

一、「序」では、兵庫県が設置された慶応四年五月二十三日（一八六八年七月十二日）から百年間の歩みを概観し、兵庫県の歴史を通観できるように配慮した。

一、「第一編」の対象とした時期は、昭和四十二年から五十四年までであるが、叙述の都合でその前後に及んでいるところがある。

一、文中の年号は、和暦を用い、節の初出ごとに（　　）で西暦を付記した。

一、本文の記述は、原則として常用漢字・現代仮名遣いを用いた。ただし、固有名詞などで常用漢字以外の漢字を用いた箇所もある。

一、人名や、難読または誤読のおそれのある語句には、原則として章の初出ごとに振り仮名を付した。

一、人名は、原則として敬称を省略した。

一、市町名を旧名で記した場合は、原則として節の初出ごとに（　　）で発行日現在の名称を記した。

一、度量衡は、記述の内容により尺貫法も使用した。

一、本文中の写真・図・表にはそれぞれ通し番号を付し、出典を（　　）で記した。図・表は巻末に一覧を掲げた。

一、本文の叙述は多くの研究成果に依拠しているが、本書の性格上、典拠を省略した。ただし、引用した場合は「　　」で示し、出典を（　　）で記した。なお、参考にした主な文献は巻末に掲げた。

一、執筆分担者は巻末に一覧で示した。

一、史料に基づいた本文の叙述の中には、不適切である等の理由により現在では用いられていない用語や、今日の社会通念によるものとは異なる表現もあるが、史実を正確に記録する観点から、そのまま用いた。

題字　黒田賢一

兵庫県150周年記念

兵庫県史 ～この五十年の歩み　第一巻

目次

口絵
発刊に当たって
凡例

序　兵庫県百年史を受けて……3
第一節　兵庫県の誕生―ひょうご五国の成り立ち……4
第二節　大正期の兵庫県―民主化、工業化……15
第三節　昭和前期の兵庫県……20
第四節　敗戦・復興そして成長へ……25

第一編　高度経済成長とひずみ……33
はじめに……35
第一章　高度経済成長とその終焉期の行財政……41
第一節　経済開発から社会開発・文化開発へ……41
一　金井県政期（昭和三十七（一九六二）年十一月―昭和四十五年十一月）　41
二　坂井県政期・前期（昭和四十五年十一月―昭和五十三年十一月）　51
三　多党化の時代　64
第二節　地方行政の膨張と財政―経済の波と昭和五十年財政危機からの回復……73
一　高度経済成長期の県財政　73
二　石油危機後の財政危機と回復　82
第三節　行政需要の増大と県本庁組織の拡大……90
一　県本庁組織の拡大と行政運営の改善　90
二　県政百年記念事業の展開　96
第四節　均衡ある発展に向けての地域行政の体制整備……99
一　昭和四十～五十年代半ばにかけての市町の状況　99
二　広がる地域連携の取組　101

三　自治振興助成事業の創設　107
四　六地域の県民局・北摂整備局設置による市町支援　109
五　財政危機から脱却する市町財政　111

第二章　経済情勢の変化と迫られる産業構造の転換……115
第一節　兵庫県の産業経済―高度経済成長から安定成長へ……115
一　重工業部門の発展と就業構造にみる「二重構造」の変容　115
二　二つの外的経済ショックと県内経済　129
三　流通業の新展開　142
四　労働行政の性格変化と兵庫県産業雇用ビジョンの策定　150
第二節　高度経済成長と農林水産業……156
一　高度経済成長と農業施策の変化　156
二　農林水産業に関する基盤整備　163
三　卸売市場の充実　165
四　高度経済成長下における林業と水産業　167
第三節　変化する科学技術の役割と情報化の進展……173
一　科学技術による産業イノベーションの歴史　173

二　科学技術の役割の変遷　178
三　情報化の進展　182

第三章　過密過疎と均衡ある県土基盤の整備……191
第一節　地域振興・まちづくりの先導的な試み……191
一　過密過疎の同時解消に向けて　191
二　国土軸の整備と広域生活圏の設定　193
三　秩序ある生活文化社会の構築　204
第二節　高度経済成長下における住宅地の新規開発……212
一　住宅の量的拡大から質的向上へ　212
二「一世帯一住宅」の実現　215
三　住宅地の新規開発　218
四　市街地整備　222
第三節　高度経済成長下における緑化……226
一　緑地、公園、景観政策の状況　226
二　高度経済成長の中における緑化の機運の高まり　229
三　市民のレクリエーションの場としての公園　234

四　景観からの都市のまちづくり　238
第四節　自然災害への対応と上下水道の整備……241
一　風水害に対する基盤整備　241
二　水需給計画と広域水道用水供給事業の展開　250
三　流域下水道事業の推進　255
第五節　人口集中と交通基盤の整備……258
一　激増する交通量や輸送需要への対応　258
二　人口集中と道路・鉄道の整備　259
三　騒音問題と空港行政の展開　268
第六節　都市化の進展と災害……272
一　都市化の急激な進行と頻発する風水害等への対応　273
二　都市化に伴う災害対策の開始　284
第四章　深刻化する公害への対処と自然環境保護……289
第一節　高度経済成長期の公害、自然環境保護―概観……289
第二節　深刻化する公害への対策……291
一　公害防止のための体制整備　291

二　大気汚染対策　297
三　水質汚濁対策　303
四　土壌汚染対策　314
五　瀬戸内海の埋立て　315
六　ＰＣＢ問題への対応　321
七　交通インフラの整備と公害問題　323
八　地盤沈下対策　330
九　廃棄物処理法の制定・施行と兵庫県の取組　331
第三節　自然環境保護の取組……334
一　自然保護条例の制定と自然保護行政の展開　334
二　野生動植物の保護　337
第五章　大衆消費社会と生活の文化化……339
第一節　消費者の時代とコミュニティ形成……339
一　消費者の時代の到来　339
二　コミュニティ政策の進展　348
三　国際婦人年を迎えて　359

四　モータリゼーションの進展と交通戦争　366
第二節　モノから心へ―文化の時代の先駆け……372
一　本格化する生活文化行政　372
二　地域に根ざした文化施策の展開　385
三　文化の殿堂　390
第三節　スポーツ振興と障害者スポーツの基盤形成……395
一　スポーツ振興法制定を契機としたスポーツ推進施策の展開　395
二　県民の健康づくり・体力づくりへの関心の高まり　398
三　リハビリテーションから社会体育としてのスポーツへ　403
四　公営競技運営体制の再編　405
第四節　地方自治体による積極的な国際交流のはじまり……407
一　国際交流の進化と拡大　407
二　外国人に開かれた社会を目指して　413
第五節　マス・ツーリズムの進展と観光の質的向上……416
一　国内のマス・ツーリズムの展開と県内観光の動向　416
二　観光の質的向上への取組　420
三　海外旅行の大衆化　424

第六章　社会や家族の構造変化と社会福祉の展開……431
第一節　疾病構造の変化……431
一　「成人病」対策の推進　431
二　公害に関する健康調査事業の推進　434
三　難病・障害者（児）等に対する施策　438
四　感染症・食品衛生対策　441
五　医療対策　445
第二節　高齢化社会における福祉の増進……452
一　高齢化社会の到来と老人福祉　452
二　総合的な障害者福祉の展開　457
三　地域福祉への展開　465
第三節　保育ニーズの高まりと福祉優先への転換……470
一　女性の社会進出と保育ニーズへの対応　470
二　児童福祉施策の充実・展開　477
三　青少年問題の顕在化と対策　485
第四節　社会福祉の充実に向けた体制づくり……491
一　貧困問題への対応　491

二　国民皆年金体制の実現　495
三　母子福祉と女性の保護　497
四　援護行政の実施　503
第五節　同和対策事業と同和教育・啓発活動の推進……513
一　同和対策事業特別措置法の施行　513
二　同和対策事業の推進　521
三　同和教育・啓発活動の推進　527
第七章　教育の量的拡大と質的向上……539
第一節　学習者の量的拡大の中での教育条件の整備……539
一　学習者の量的拡大　539
二　教育諸条件の整備　548
三　学校教育充実への取組　553
四　高等専門学校の創設と発展　560
五　大学教育の拡大と大学紛争　565
六　学校法人制度創設と私学振興　574
第二節　社会教育と生涯教育の基盤整備……581

一　急激な社会構造の変化と社会教育・生涯教育の展開　581
二　生涯教育の拠点整備と社会教育施設の拡充　584
三　生涯教育機会の充実　591
四　地域における社会教育の担い手　603
五　高齢者の学びと「いなみ野学園」の先進性　607

コラム

「高速道路」とは　271　コープこうべと生活の科学化　342　兵庫県の共同社会開発の取組　357　相次ぐ「県の象徴」の制定　375　空前のブームを呼んだ宝塚歌劇「ベルサイユのばら」　394　兵庫県と大阪万博　423　森永ヒ素ミルク中毒事件　445　保険医総辞退問題　450　島田叡と兵庫・沖縄両県のつながり　510　「分離独立」で県立高校を新設　547　青空公民館　589

〔巻末付録〕

執筆者一覧
県史編纂関係者名簿
資料提供者・協力者一覧
図・表一覧
参考文献一覧